

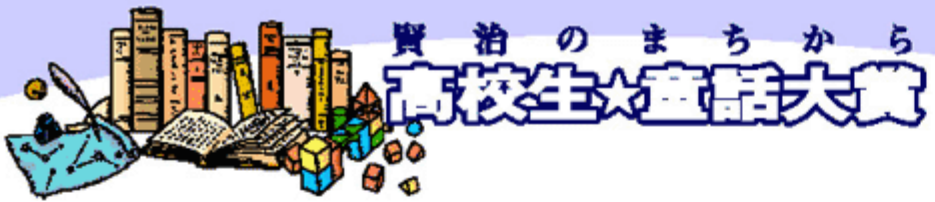
第 18 回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「竜の子」

徳島県立富岡東高等学校二年 藤川 諒子



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『竜の子』

徳島県立富岡東高等学校二年 藤川 諒子

体が軽い。

起きてすぐに、ケイタはそのことに気が付き、驚いた。

何しろ昨夜はひどい熱でうなされていたのだ。加えて激しい頭痛がして、起き上がれないほどだったのに、今はむしろいつも以上に元気だった。

まだ日も昇っておらず、家の中は薄暗い。窓の外は夜中の真っ黒い闇やみではなく、朝特有の青い闇が占めている。

。玄関の開放たれた戸からは清涼な空気が流れてきていた。この里では、風通しをよくするために戸は開いているのが常だ。

ぼんやりと窓の外を眺めているケイタの前を、音もなく、一つの影が通りすぎた。影はそのまま玄関に向かい、出ていこうとする。

「カズー！ どこ行くんだー！」

ケイタが慌あわてて呼び止めると、影は立ち止まり、振り返った。

「兄ちゃん？」

ケイタはカズのそばに走り寄った。

「大丈夫か？ 熱は下がった？」

「下がったみたい。なんだかすごく体が軽いんだ」

カズも昨夜はうなされていたはずだった。しかし、確かに元気そうである。ケイタはほっと胸をなで下ろした。

「どこに行こうとしていたんだ？」

ケイタはそう尋たずね、それと同時に気付いた。自分自身、ある場所に強く引かれている。きつとカズも同じだ。

「……竜の山に。なんでだろう？ 呼ばれてる気がするんだ。行かなくちゃ、って思ってた」

カズは自分でも不思議そうに答えた。ケイタも不思議だった。今まで一度もあの山に登りたいなんて思ったことはないのに、今は山に行くことがとて



も自然で、当然のことのように思える。そして、この思いを弟と共有しているということも不思議だった。

「ぼくもなんだ。なんだか竜の山に行かなくちゃいけない、という気になる」

「兄ちゃんも？」

二人で顔を見合わせて笑った。

ケイタは弟の手を握り、歩き出した。

「行くう」

ケイタとカズが住む竜の里は、竜の山に近い。竜の山にはその名の通り竜が住んでいるが、その山頂付近には常に雲が立ち込めており、普段は竜の姿を見ることはない。

「今夜は満月だね」

カズが嬉しそくに言った。

いつの間にか東の空が白み始めており、西の空ではほとんど真ん丸に近い月が白い光を放っている。ケイタには満月と何ら変わりなく見えるが、厳密にはわずかに欠けているらしく、今夜満月となる。

今日はよく晴れているから、満月がきれいに見えるだろう。しかし、カズが嬉しそうなのは満月だからというだけではない。

「竜の天駆あまがけが見られるね」

そう、カズが楽しみにしているのは、竜の天駆けである。竜の山に住む竜は、満月の夜になると、竜の子を連れて空に昇っていく。夜空に白く輝く竜と竜の子はとても美しく、これらが空を昇るようすを竜の天駆けと呼ぶ。

いつもは早寝な里の人々も満月の日はかりは起きていて、竜の天駆けを見ている。ケイタもこれまで何度も見てきたが、その幻想的な美しさにはいつも息をのむのだ。

竜の天駆けのことを考えて、自然ケイタの頬ほおも緩ゆるんできた。カズがケイタを見上げて、ふふっと笑った。

「楽しみだね」

「そうだな」



カズはつないだ手を嬉しそうにぶんぶん振った。しかし、ふと手を振るのを止めて、言った。

「ぼくらは竜の山に行つて、何がしたいんだろうね？」

「……さあ？」

ケイタは首をかしげた。カズも隣で兄のまねをして首をかたむける。それを見て、ケイタは思わず笑ってしまった。

「でも、行きたい、行かなくちゃいけない、って思うだろ？」

「うん！」

カズが元気よく答えた。ケイタも心の中でうん、とうなずく。さっきの質問はカズに対するものであると同時に、自分に再確認するものでもあったのだ。

「……だから、行こう！」

「うん！」

またカズが手を振り始めた。

もうすぐのところに竜の山は迫っていた。

空には雲一つないのに、竜の山の頂上付近はあいかわらず濃厚な雲に覆おほわれていた。

山のふもとに着いた二人は、迷いなく山を登り始めた。どうしようもなく登りたいと思うのだ。登らなければならぬ、と。

山登りは大変なことのはずだが、二人は子どもとは思えない速さで山を登っていった。

ケイタは不思議だった。ちっとも足が疲れないのだ。足だけではない。病み上がりだというのに、少しも疲れを感じない。カズも同じようで、かなり登ったはずなのにまだ元気で、軽い足取りで歩いている。

やがて、うっすらと霧が漂ただよい始めた。足元から静かに忍びよってきたそれは、進むにつれて濃こくなり、しばらくすると視界は真っ白になった。

兄弟は手を強く握り直して、はぐれないように、転ころぶらないように、慎重に一步一步進んでいった。

「これは、あの雲の中なのか……？」



ケイタは竜の山の頂上付近をいつも覆っている雲を思い出した。そうだとすれば、山頂は近い。

「兄ちゃん？ いるよね？」

カズが不安そうに言った。

「いるよ」

ケイタは左手にぎゅっと力を込めた。ケイタは左手でカズの右手を握っているから、カズはケイタの左隣ひだりごいしを歩いているはずなのだが、すぐ隣のカズの姿が見えないほど霧は濃密になっていた。

もう引き返そう。

そうささやく声をする。それは自分の心の声で、ケイタはその声に従いたいと思う。

しかし、どうにもこの先に引き付けられる。どうしても進まなければならぬと感じる。引き返そう、とささやく声を打ち消す大音声で、行かなければ！ と叫ぶ自分がいるのだ。

カズも不安がりをするものの、帰ろうとは言わない。きっとカズも感じているのだ。この先に行かなければならない、と。

兄弟はゆっくりと、しかし確かに進んでいった。

突然、ぱっと視界が開けた。霧が晴れたのだ。

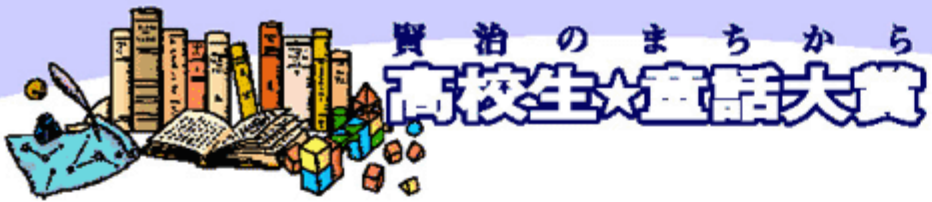
目の前に広がる光景に、ケイタは口を開いたまま固まった。

そこには竜がいた。里で一番大きい長老の家よりも大きい。竜は真っ白なうろこをまとい、少し発光しているように見えた。長い体をらせん状に巻いて、目を閉じ、眠っているようだ。

竜の周りには数えきれないほどの人がいた。走り回ったり、ふらふらと歩いたり、しゃがみこんで足元を見つめたり、とみんな思い思いに過すごしている。

ケイタはその人たちに少し違和感を感じた。しばらくその原因がわからなかったが、じっと人々の様子を眺めるうちに気付いた。大人と呼ばれる年齢の人が極端に少ないのだ。ほとんどがお年寄りと小さな子どもで、中にはまだ生まれたてのような赤ん坊もいた。

「またか」



低い、しゃがれた声が聞こえた。ケイタは身を固くした。竜が目を開いている。竜の瞳は透き通った紫色で、ケイタは吸い込まれるようにその瞳に見入った。

「またこんな幼い子が……。兄弟か？」

「は、はい」

緊張して声が上がった。

竜は大きくため息をついた。

「最近病が流行^{はや}っているから、死人が多いな。早くおさまってほしいものだ」

「……し、死人？」

ケイタが尋^{たず}ねると、竜は目を大きく見開いて、それから目を伏^ふせた。

「ああ、気付いていないのか」

竜は目を上げ、ケイタとカズを順に見て、言った。

「お前たちは死んだんだよ」

ケイタは竜の言ったことが信じられなかった。隣のカズは不思議そうな顔をしている。幼いカズには、ケイタ以上に、竜の言っていることが理解できないらしい。

「信じられないのも無理はない。しかし本当だよ。ここは死者が来る場だ。わたしは死者の魂を天に送り届ける役目を負っている。死者をここに呼び、満月の夜に天へとお返しするのだ」

ケイタは竜の言っているのが、竜の天駆けのことだとわかった。満月の夜、竜は死者の魂を天に送っていたのだ。あの無数の光は、竜の子と呼んでいたあの光は、死者の魂だったのだ。

竜は、呆然^{ぼうぜん}とするケイタに哀れみの目を向けた。

「人はこの世に生を受け、地上で過^{すご}し、死ねば天へと帰る。天へと帰った魂は、再び新たな生命^{いのち}としてこの世に生を受ける。そうして生命は巡っているのだ。一度天へ帰るだけなのだから、何も恐れることはない」

カズがケイタの手を引っ張った。いつの間にか竜から隠れるようにケイタの後ろに引っ込んでいたカズは、「こわい」とケイタに小さな声で訴えた。

ケイタはカズと向き合い、膝^{ひざ}を折ってカズと顔の高さを合わせると、そっとカズの両手を取った。



「大丈夫だよ。兄ちゃんも一緒だ」

カズの目を見つめて言いながら、ケイタは自分自身にも言い聞かせていた。

大丈夫。恐くない。

こっくりとうなずいたカズをケイタはぎゅっと抱きしめた。

「おい、お前」

竜が言った。

ケイタはカズから身を離し、竜を見つめた。カズもケイタの隣に並ぶ。もう兄の体に隠れてはいない。

竜は驚いたような顔をしていた。

「その、兄の方だ。お前は、まだ死んでいないな？」

「死んでいない？」

ケイタは自分の体に目を落とす。自分ではもちろん死んでいるように感じない。足もついているし、透けてもいない。それはカズを見ても同じで、生きている人と変わりなく見える。

「お前はまだ死んでいない。頭の中から糸のようなものが出ている。それが身体と魂をつないでいて、死ぬとそれが切れて魂が身体から離れてしまうんだ。しかしお前は——」

「糸？」

ケイタは頭を触った。しかし、糸のような感触はない。

「あるよ。糸」

カズが背伸びしてケイタの頭の上を指差して言った。

「ずっと向こうにつながってる」

カズはそのまま来た道の方に指を動かした。カズの指の動きを目で追うと、そこには確かに細い糸のようなものがあった。

「お前はまだ生きている。この糸を伝えていけば身体に帰れるだろう。……」

お前は竜の里の者だな？」

「は、はい」

竜は、やはりな、と苦い顔をしてうなずいた。

「竜の里はこの山に近いから、死んでいなくても弱っている者を引き寄せてしまうことがあるんだ。ここは力が強いから、身体と魂の結びつきが弱まっ



ていれば、魂は身体から離れてここへ引き寄せられてしまう。特に子どもは魂が身体にしっかりと定着していないから離れやすいんだ」

竜の話に聞き入っていたケイタは、はっと一つのことばに思い至った。

ぼくは生きている。では――

「カ、カズは？」

「弟の方は死んでいるな」

「そんな……」

ケイタは絶望感に包まれた。

「……カ、カズが死んでるんなら、ぼくもこのまま一緒に死ぬさ」

「ダメだよ兄ちゃん。そんなこと言ったら」

「カズ……?」

カズは笑っていた。

「ぼくはさ、一人でも大丈夫だよ。兄ちゃんはまだ生きているんだから、ちゃんと生きなくちゃ。ぼくのために死ぬなんて無しだよ」

「カズのために……? 違うよ。ぼくが一人じゃ生きられないんだ。カズがいなくなったら一人になっちゃうじゃないか!」

ケイタは叫んだ。

「何でぼくから何もかもうばうんだ! 父さんも! 母さんも! その上カズまでいなくなったら、ぼくはどうすればいいんだ!」

はあっ、とケイタは荒く息をついた。高ぶった感情が少しずつ冷め、いくらか落ち着きを取り戻したケイタは、カズを見てはっとした。

どうしてカズが笑っているなんて思ったのだろう。

カズの顔は苦しそうで、悲しそうで、笑顔を作ろうと無理やりに上げられた口角が痛々しかった。弟にこんな顔をさせるなんて、とケイタは自分がイヤになった。カズがつらくないはずがない。死んでしまつて、これから天に昇るのだと聞いて、恐くないはずがないのだ。ケイタ自身、恐いと思ったのではなかったか。カズだって「こわい」と言つてケイタにしがみついていたではないか。

「ぼくは、ダメな兄ちゃんだな……。ごめんな、カズ。一緒には行かない。ぼくは帰って精いっぱい生きるよ」



涙が流れないのは、やはり魂だけの存在だからなのだろう。胸は痛むのに、涙はにじんでもこない。

「うん。がんばって、兄ちゃん。……さよなら」

兄弟そろってひどい泣き顔だった。しかし、そこに涙は一滴も流れない。

「さよなら、カズ」

兄弟は最後の抱擁ほうようを交わした。

そして、兄だけが山を下り始めた。

「ケイタ……？ ケイタ！」

重いまぶたを持ち上げると、目の前に老女の顔があった。明らかにほっとした様子の老女の周りにどやどやと見知った顔が現れる。里の人たちだ。いずれも安心したような顔をしている。

「……長老様」

「いいんだよ、無理にしゃべらなくて。のど乾いてないかい？ 誰か！ 水を！」

長老と呼ばれた老女は、ケイタの答えも聞かずに水を持ってこさせる。左右から支えられながら身体を起こしたケイタは、ゆっくりと椀に入った水を飲み干した。

「それでね、ケイタ。カズは……」

長老がそう言いかけたそのとき、ふと部屋に灯りが灯されていることに気が付いた。はっと窓の外を見ると、すでに暗い。

「……もう夜なの？」

尋ねる声が震えた。

「ああ、本当だ。日が暮れてるね」

長老が外を見て答えた。そのあとふっと目を伏せ、苦しそうに顔をゆがめた。

「それでね、カズは」

「知ってるよ」

長老がはっと顔を上げた。

「ケイタ！」



ケイタは立ち上がろうとしていた。周囲の人々が慌ててそばに寄り、ケイタを支えた。ケイタは体の重さに驚いていた。まるで自由に動かない。まだ熱があるらしく、頭も痛む。

それでも、ケイタは何とか立ち上がり、玄関へと向かった。何人もに助けられながら足をひきずるように歩き、ようやく外に出たときには額に汗が浮かんでいた。

ケイタは暗闇の中、顔を仰向けた。そこには砂をちりばめたような満天の星があった。その中に満月を見つけ、ケイタはじっと視線を定めた。

「……カズは、死んだんだよね」

「ああ」

長老も空を仰ぎ、そっと家の壁にもたれかかった。ケイタは両脇を里の人たちに支えられたまま、震える足でどうにか立っている。

「ケイタもカズも、昼が近づいても畑に出てこないから、心配になって様子を見に来てみれば、二人とも寝込んでいるんだから驚いたよ。カズは、そのときには、もう……」

悔やむように長老は言った。その瞳に涙が光る。

「……でも、ケイタだけでも助かって良かった。みんな心配していたんだ。

……本当に、良かった」

ケイタは改めて周りを見た。長老を始め、里の人たちが大勢ケイタの周りに集まっている。みんな一様にケイタを心配そうに見つめていた。

「あ……」

ケイタが口を開いたそのとき、辺りがパアッと明るくなった。顔を上げると、竜の山から竜と竜の子が昇り始めたところだった。一直線に昇る竜と、その周囲をふわふわと漂うように付いていく竜の子。竜と竜の子は星の光がかすむほど眩く、白く輝きながら、どんどん高みへと昇っていく。

「……カズ」

ケイタは頬を熱いものが伝つのを感じた。

「ぼくは、一人じゃあなかつたよ……」

周囲ですすり泣く声が聞こえた。みんな、カズの死を悼んでいるのだ。た。

「カズ、さよなら」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

竜は竜の子と共に光の尾を引いて、天を駆けていった。